

日本のバリアフリー絵本の展開と課題

攪上久子

本論文では、日本のバリアフリー絵本の展開を掘り起こし、現状および課題について考察した。バリアフリー絵本とは、「障害がある子どもたちのために配慮あるデザインで作られている絵本と、障害について描かれている絵本」とする。

1, 研究の目的と構成

バリアフリー絵本研究では資料や文献が掘り起こされていないものも多く、その展開や実態などは明確になっていない。先行研究を検討すると、バリアフリー絵本の成立から今日までの展開を、俯瞰し、資料で裏付けた研究はまだ十分とはいえ、課題も含め現状の実態についての更新された研究も見いだせない。よって本研究の目的を、「日本のバリアフリー絵本の展開を掘り起こし、現状およびその課題を明らかにすること」とした。記録の散逸や消失も予想されるため、展開のドキュメントを作ることにより、資料保存や記録化も図ることも目的とした。本論文の構成は第1章第2章がバリアフリー絵本の展開、第3章第4章第5章が展開の考察である。

2, 日本のバリアフリー絵本の展開

バリアフリー絵本を「障害がある子どもたちのためのバリアフリー絵本」と「障害について描かれているバリアフリー絵本」の二つに分けて展開を掘り起こした。

第1章「障害がある子どもたちのためのバリアフリー絵本の展開」では、「手作りのさわる絵本」は、視覚障害がある子どものために、1970年前後に親やボランティアによって作られていったことが明らかになった。障害が重い子どものために考案された「手作り布絵本」は、1975年に札幌で誕生した。目の見えない親が、絵本を子どもに読んであげたいという願いから、1981年「てんやく絵本」も生まれた。印刷技術の発展から隆起印刷が可能になると、1979年「さわる絵本の商業出版」も実現した。その後、日本では視覚的な絵を隆起印刷し活字と点字を併記して、「点字つきさわる絵本」が出版されていく。「手話で読める絵本」や知的障害に対応する「やさしく読める本」は、海外から2000年前後に日本に入ってきた。障害がある子どもたちのためのバリアフリー絵本は、国際障害者年（1981年）前後にピークを迎え、2000年頃にはほぼ成立期を終了している。

第2章「障害について描かれているバリアフリー絵本の展開」では、1976年発行の『はせがわくんきらいや』が、日本初の出版である。作者自身がヒ素ミルクの被害者であり、当事者によって制作されたバリアフリー絵本でもある。草創期から1980年代の、障害について描かれているバリアフリー絵本、特に当事者によって制作された絵本には、障害の現実を社会に提示する作品が多かった。近年は絵本によ

る障害理解の必要性から、説明的な絵本が増加している。絵本にどのように障害が描かれてきたかは、当時の障害観を映す社会の鏡ともいえる。

3, 考察および課題

第3章では、バリアフリー絵本の展開に影響した社会的ファクターには、条約や法制定、国際児童図書評議会の障害児図書プロジェクト、図書館の動向や児童書出版社偕成社の活動があることを見出し、年代的な関係も考察した。(1) 1950年～1980年代中頃：草創期に国際障害者年がもたらした影響

(2) 1990年～2010年中頃：一緒に楽しめる本の志向と共生社会という理念の普遍化との関連 (3) 2010年中頃以降：障害者の権利条約とそれに伴う障害者の読書に関する法律の整備がおよぼしたバリアフリー資料の図書館所蔵数増加への影響、の3つの関連性が明らかになった。

第4章では、展開の中で増えてきたバリアを考察した。さわる絵本や布絵本が超えた「絵本にあるバリア」、出版や図書館が超えた、「環境にあるバリア」、見えない親の絵本へのアクセスや知的障害の読書権など、「読書の権利に立ちはだかっていたバリア」があることが明らかになった。

第5章では、日本のバリアフリー絵本の課題を考察した。バリアの再生産によって、バリアフリー絵本から再度取りこぼされる子どもたちがいることが一つの課題としてあげられる。また絵本は視覚文化であり、さわる絵本や遊具のような布絵本は「絵本」なのかという問題提起が、取り残されたままであることもわかった。さわる絵本の「絵」は、見える世界や形を理解させるようなさわる絵がいいのか、自分自身の力で読むことができる視覚表現から離れた絵がいいのかという課題もある。課題は展開の不備不足がもたらした「問題」ではなく、「バリアフリー」は度重なる葛藤を乗り越えて実現されると考える。これらの課題の解決に向かうために、「受け手—つなぎ手—作り手」による「共創」の重要性を指摘した。

4, 本研究の意義と限界

本研究の意義は、日本のバリアフリー絵本の展開と課題を明らかにした初の学術的試みであることである。失われつつある資料を確認し、記録するという目的はある程度達成できたと考えている。しかし、まだ掘り起こされていない資料や記録があるかもしれないという限界がある。また電子図書を研究対象に含めての研究ができなかったことは本研究の今後の課題である。